

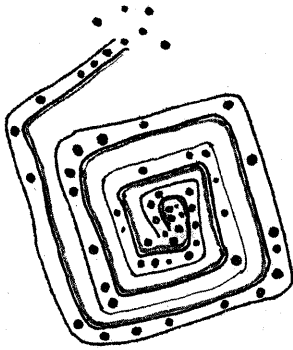
SF 的読み解き

子どもという風景

### 第三十七回

おへその見立て

堀内 守



笑う「へそ」

「へそ」を話題にする  
と、たいていの人が笑  
う。その笑い声は、大ら  
かである。小馬鹿にした  
笑い声ではない。さりと  
て大笑いでもない。洪笑  
でもない。どこか謙虚で  
つつましく、しかも和なごか  
である。

「へそ」が話題になる  
とき、知らん顔をする人  
はあまりいない。いたと  
したら相当「へそ曲り」  
である。「へそ」は、公  
然たる場で話題になるこ  
とはあまりないが、私的  
な世界では場の雰囲気

和やかにする。

さて、その和やかさは、単にふわふわと浮わついたものなのだろうか。そうではない。むしろ、この和やかさは、私たちの常識となつてゐるものをするりと通り抜けて、もうひとつの世界へ連れていくられることもあるのだ。その世界は、私たちの存在の奥深いところを示唆してくれる。だから、「へそ」を話題にすると、人びとは理屈を超えて笑い出すのかもしれない。その世界は、ちまちました、小ざかしい世界ではなく、人間社会のもろもろの差異が消えてしまうような世界かもしれない。

そう思つて、思い当たるところをさぐつてみると、「おへそ」は結構宇宙論的なテーマにもなつてゐる。スケールが大きいものだから、現代の理屈にはなじまないのである。老壮思想（老子や壮子の思想）などは、そのスケールの大きさから見ると——理屈をこねる人から見れば「バカバカシイ」といつて無視されるだろうし、少し関心をもっている人にとっては大いなる「息抜き」に

思えることだろう。

実は、「バカバカシイ」と思われながら結構好まれ、「息抜き」に活用されてきたのが笑い話であり、それは何かを話題にして、次々と笑いを誘発し、話題をズラしながら、「息抜き」を楽しむものであった。人生の「息抜き」である。世に「おこがましい」という表現で残つてゐるものは、そのナレの果てである。「おこ」は「烏澁」と書いた。これは中国南方に住む民族の名である。そのほか「おこ」は「尾籠」とも「痴」とも書いた。

きわどい境界

「痴」は、「癡」に「知」と書く。「癡」がついていても、「知」の一形態であることは直ちに推察がつく。「癡」の方も「ヤマイダレ」と読む割には境界はゆるやかである。わざと愚か者の役割を演じ、それが笑いを誘発するなどということは、今日でも芸能のなかにたくさんある。「尾籠」も「びろう」と読むと、遠まわしに表現しないと失礼な話題になってしまうが、反対に、失礼

にならない程度に、上品に表現したならば、こんなに生き生きとした話題もなかうと思われるほどのテーマに満ちている。

何もルネッサンス時代にまでさかのぼらなくともよい。「尾籠」な譚は、世界中の物語の底流に多い。糞尿譚の多いこと！

それとくらべると、「おへそ」は、かわいらしい。「尾籠」なテーマからは離れているようでいて、構造はよく似ている。色、匂い、形状を克明に記述している糞尿譚の作者たちも、こと「おへそ」に関しては、その形状を微笑みをもって記述しているのみである。

「おこ」は、意味の上では二つの系列を含み込んでいる。第一は、「ばからしい」という系列。「おろかしい」「あほくさい」「ばかばかしい」という日常語の系列。第二は、「なまいきだ」という系列。「出しゃばり」「出過ぎている」という日常語がこれに含まれる。

「おへそ」は、この二系列にびったりのテーマである。

「おへそ」という音がすでに日常の音のネットワークのなかでは少なからず異質ではないか。「臍」という漢字を見つめても、異様さは増す。なお、見つめていると、異世界が見えてくる思いがする。

古き時代、「おへそ」の下一寸ほどの所に体気がたまると健康になると信じられた。今日でも「気を鎮め」たり座禅を組んだりするときには心の重心をそのあたりにもっていくものとされている。「臍下丹田」というのがそれを表わす。

「出しゃばり」の方は、まさにそのものである。「おへそ」が身体からの類推で別の「出ているもの」に転移させられ、いろいろなのが「○○のへそ」と呼ばれていた時代がある。小突起や、物の中央にあるふくらんだ部分が「へそ」と呼ばれていた。石臼や重ね戸棚などのかさなり目にある小突起は「へそ」だった。

おへそのくすぐり

夏、はだかになって水遊びをしている子どもたちが、

何かのきっかけで、「おへそ」と口にする。とたん、このことばがいっせいに伝播する。「おへそ」「おへそ」「おへそ」……。そして笑いこぼる。

この小景の向う側には、いま見てきたような和やかな世界から厳肅な世界までが広がっている。

カミナリが鳴ると「おへそ」をカミナリさんに取られてしまう。そういう言い方は今でもなされている。腹を冷やさないために腹掛けをする。その腹掛けのことを「カミナリさん」と呼んでいるところもある。この意味の転移は、子どもの世界ならではの面白い現象なのである。

「カミナリにおへそを取られる」という言い方。

それはこわい話である。そして、しだいに「おこ」なる話に転じていく。本気で信じていた子も、時を重ねるにつれて、何となくすぐったい話だと理解できるようになる。話そのものがこっけいに思える。そればかりか、その話を本当だと信じていた自分が変わりはじめたこともわかってくる。後者の方は、複雑な思いにあふれ

ている。自分はあるなにも幼なかったのだという気持ちと、自分にもそういう無邪気な時代があったのだという二重の気持である。一方は、世界が狭かった自分への反省に通じ、他方は、やや「なまいき」になった自分への反省に通じている。「ばかばかしい」という系列と、「出しゃばり」という系列はここにおいても生きている。

自分でさわっても全然おかしくないのに、他人にさわられると、どうして「おへそ」はくすぐりたいのだろう。

「おへそ」を話題にするだけで、人びとが笑い出すのは、このような奇妙な体験があるからではないか。

自分でさわっても何ともない。それなのに、他人にさわられると、くすぐりたい。この体験は、「くすぐったい」という体験、つまり身体の奇妙なしくみに目を開いていく入口のようなものである。生きている身体は、他者の存在を前にすると、こういう奇妙な現象を生み出す。

実際に他人に手を触れられなくとも、「くすぐるぞ

う」とかまえられただけでも、自分の身体はむずむずしてくる。そして逃げまわる。むずむずは増幅していく。

くすぐることを「櫛る」と書き、「こそぐる」とも読む。この漢字は面白い形をしている。字までが、「くすぐる」ような形に見えてくる。それは本当は錯覚なのであろう。実際には「くすぐる」とか「櫛る」などよりも、体験の上では「こちょこちょ」という擬音による表現の方が先行し、さらにそれに先行するものとして身体の「むずむず」があるはず——と考えられるからである。

「むずむず」は、他者の存在をもとにした場がなくては生まれない。

### へその緒

この「むずむず」の由って来たところは深い。自分の身体を超えている。母胎内で母体と一体化していた時の絆きずななのだから。

産科学の用語を超える「母胎」「一体化」「絆」「緒」。

産科学の用語を超えた「へその緒」の民俗的・宗教的扱い方。誕生とともに「へその緒」は切られ、医学的に処置されなければならない。やがて、新生児のおへそに付いている「へその緒」は取れる。取れたあとの「おへそ」の形は、新生児のおなかの大きさとくらべると大きく感じられる。のみならず、まだ形が整わない。「緒」がついていた痕跡がその形に残っているからである。

「おへそ」は当分は大事に扱われる。新生児に湯をつかわせるとき、おとなたちはことさらおへそのあたりに気を遣う。

当の新生児はそんなことを知らない。成長してのちも、思い出すことはない。思い出そうとしても、記憶にはないことなのである。

新生児の「おへそ」の形は当分出っぱっている。取れてしまった「へその緒」の方は、桐の箱にいてねいに収められる場合もある。本当は、実に多様な処理のされ方をしてきたのだった。

桐の箱に収められたものも、時がたつうちに色も形も

変わり、しなびて、からからになっていく。何やら異様なモノに姿を変えていき、たんすの片すみに入れられたまま忘れ去られていく。

でも、おへそは子どもの夢をさそう。

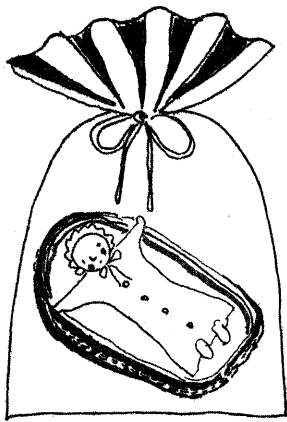
時折、おへそはかゆくんだり、赤くはれたりする。

そして、おへそは自己主張する。そのほかは忘れ去られている。おへそのない人形に驚いた経験のある人も多いことだろう。ふだんは忘れ去られているのに、向こう側に出現した人形におへそがないと異様に思えてくるから

面白い。

かといって、いかにもとってつけたように、人形のおなかにまん丸なおへそがあるのも異様なのだ。

こんなわけで、人形のおへそは、実にかわいらしくつくられている。人形ばかりではない。泰西の名画や彫刻を見ても、作者がいかにおへそに気を遣っているかが見えてくる。天使と並んで描かれているキューピッドの丸っこい手足は、おなかのかわいいおへそがなかったら、「かわいさ」は半減するのではないか。そう思われ



るくらいだし、身体の美しさに気づいた画家たちがおへその形とくぼみと、おなかの筋肉との関係を描くの苦心したのもよくわかる。

注意したいのは、おへその形ばかりではなく、おへその位置である。どの辺に描くかによって、身体のバランスはまるで変わってしまう。

そもそも、こんな変なものがない——と画家や彫刻家たちはいちどならず気にしたことであろう。マンガならば、その位置を点で示すだけでもよいだろうし、場合によっては×印を描くだけでよいのに、絵や彫刻になると、おへそはしかるべく自己主張をしてくるのである。

おへそは身体の力、筋肉の表情を統合している。もし、おへそがなかったなら、おなかはのっぺらぼうになり、マネキンのように冷やかになってしまうだろう。

出っばっていた幼児のおへそはしだいに形がよくなり、おなかのなかにひっこんでいく。

茶をわかすへそ

その由来はよくわからないが、「へそで茶をわかす」とは「おこ」な表現である。「はからしい」までに意表をついた表現であり、気の利いた表現であり、その上、歯切れもよい。

表現が「おこ」だけではなく、「おこ」を代表している。形が「おこ」だけでなく、内容も「おこ」なのである。

反対の極には「ほぞをかむ」という表現がある。「ほぞ」とは「へそ」のことであるから、「へそをかむ」と言いかえることもできるが、迫力は「ほぞ」の方が強いようだ。「ほぞをかむ」とは、かなり古い表現で、かもうとしてもかめなはずのへそを、あえてかむというところから、「後悔しても及ばない」というたとえに用いられる。

この「ほぞ」のみじめさ、とくらべたら「へそで茶をわかす」方は、「へそが宿がえをする」と並び、ひどくおかしいこと、おかしくてたまらないことをさして、相当なレトリックといっても過言ではない。それは「ほ

ぞをかむ」よりも新しく、饒舌な文化の中から生まれた表現であろう。「へそ曲がり」「へそ繰り」と同時代、同一のサブカルチュアの中から生まれた。

「ほぞ」系と「へそ」系を組み合わせてみると、「ほぞをかむ」式の表現は、大仰おおやうであり、教訓的であるし、「へそ茶」系は、大仰であることは共通しているが、ズレを楽しみ、笑いを誘発する構造になっている。だから、「ほぞをかむ」方は、教訓、格言、諺として通用した。他方、「へそ茶」の方は、ドンデン返し、アクロバットに似て、日常のあそびの世界に生き続け、日常生活の規範をつき抜けてみたり、ひっくり返したりする会話の世界に生き続けた。

### 世界のへそ

小高いところ、平らかなところに少し小高くなっているようなところは「へそ」と呼びならわされてきた。

広場をつくる。すると、まんなかに柱を立て、塔を建て、何とかして上下の関係をもち込む。それが文化の発

端になっている。世界像を描くとき、宇宙像を描くとき、人間はかならず「へそ」のたとえを使った。その場合の「へそ」は、天と地をつなぎ、地のまん中を示し、この世界がそこを起軸として秩序づけられていることの証あかしとなった。岡、山というような自然物が「へそ」と見なされることもあり、岡や山が聖なるシンボルとなることもあった。岡や山がない平地の場合には、岡や山に模して柱を立て、塔を建てた。それを岡や山に「見立て」たのである。

「見立て」は、本物ではない。「つくりもの」である。だが、それが「こしらえもの」であることを、それをつくった人間たちも知っていた。つまり「見えて」は、引き立て、つくり立てることであった。

遊びには、この意味の「立てる」と共通するものがあるらしい。

「おへそ」が、その実際の場合から離れさせられて、宇宙の「へそ」として人間に安心感を与えるのも、そのためである。だから、おへその話題は人を和ませるのであ



ろう。いつときの笑いであっても、おへその笑いは、人間が忘れていた右のようなものもろのものを深層から見せてくれるからであろう。

### 迷宮としてのおへそ

おへそは穴の形をしている。しかし、蝸虫に似て、内部はどうなっているのか、よくわからない。トンネルのように向うが見えることもない。時どき、ゴマなるものが出たりするぐらいなものである。

だからこそ、内部は迷宮に思えるのだ。

蝸虫のようにぐるぐるまわりの形をしていて、どこかに通じている。その「どこか」はよくわからない。好奇心を誘うけれども、探検する手だてはない。したがって、夢や幻想をかもし出すのであろう。

ここでは素朴なリアリズムはすべて拒否される。

「夏、おなかを出していると、カミナリさまにおへそを取られてしまうよ」

「うん」

これが予想されているシナリオである。

素朴リアリズムが少し徹底すると、これに対する返事は少し変わる。

「取られっこないもの。だって凹んでしまっただけで出てないもの」

もう少し進む。

「どうやって『取る』のかな。そのあとどうするのか。飾っておく？ それとも食べてしまう？ マンガの本には佃煮つくねにしておくって描いてあったけど……」等々。

科学に対する信仰は、日常場面においては素朴リアリズムを強化した。夢や幻やロマンを「おこ」なものとして（愚かなるものとして）小馬鹿にするのが「科学的」ということになるほどになった。けれども、どこかおかし。「おこ」には別の系列、つまり「なまいき」という系列もあった。素朴リアリズムがいきまいて「なまいき」になると、あの和らぎやわらを忘れ、消去してしまい、ついにはニヒリズムに流れていく。そして次々と新奇なよ

そおいをもった流行語をつくり出し、これこそ世界や人間を救出できる護符であるとばかりにつくり立てる。ところが、わずかの時がたてば、それはすべて忘れ去られていく。最新の流行の空しさが見え見えである。

ならば、もっとしたたかに、「おとな」とか「子ども」という区分を超えてみて、共通に話題にできるネタはないのだろうか。こう思って、「おへそ」にたどりついたわけである。

「おへそ」は意外にも深く、広い世界に通じていた。

「おへそ」は、私たちを引き立てたり、逆に私たちが「おへそ」を別の何かに見立てたりすることができ、見立て、引き立て、つくり立て、そのどこをとってみても、「おへそ」は大いなる笑いの根源を開示してくれる。

これを「へそ曲がり」とのしられようが、「へそで茶をわかす」とからかわれようが、追究はやめないでおこう。「おへそ」というテーマは、ぐーんと広いのだから。

(名古屋大学)

